

令和4年4月1日

京口門だより No.102

例年のごとく桜が咲き明るい春の雰囲気ですが、新型コロナウイルス感染症も減少傾向にありながら増えたり減ったりと先が見えにくい状態です。世界ではロシアの暴虐が収まらず、怒りや不安が拡がっています。穏やかな春とは言いがたいありさまです。

ところで桜の樹皮が漢方薬として使われるのをご存じでしょうか。桜皮といってわが国で作られた漢方薬に用いられます。その薬は十味敗毒散といい、あの紀州の華岡青洲の作り出した薬です。

華岡青洲はわが国いや世界で初めて麻酔をして乳癌の手術をおこなった医者です。江戸時代にオランダ医学が入ってきてその外科学を学んだのですが、若き日には京都で吉益南涯という漢方医に漢方医学を学んでいます。彼は通仙散(麻沸散)という漢方の麻酔薬を考え出し、何度も動物や人で実験研究し、自分の母や妻も実験台にして完成させます。その麻酔薬を用いて慎重に乳癌の手術をしています。研究者によれば当時としては相当高い手術の成功率であったと言われています。この話は有吉佐和子の小説の「華岡青洲の妻」で有名で、映画やドラマにもなりました。

華岡青洲は外科医と言われますが、江戸時代は外科の中に皮膚科も含まれていて、様々な皮膚病の治療も行っていました。「瘍科瑣言」というような皮膚科の治療書を著しています。その中に桜皮の入った十味敗毒散という薬が出てきます。十味敗毒散はオデキといわれる初期の化膿性皮膚病、湿疹、じんま疹、原因不明の痒みをともなう発疹、虫さされなどに幅広く使われる漢方薬です。桜皮は解毒作用をもった薬として使われています。化膿する皮膚病は早期に対処すれば面倒なことにならないで済みますが、長引いた皮膚病には別の薬を用いることとなります。すなわち化膿がひどく外科的に切開しなければならなくなる前に、この十味敗毒散を用いるべきです。

また華岡青洲はさまざまな塗り薬を作っています。代表的なものが紫雲膏です。ムラサキという植物の根と当帰という植物の根と香油(ゴマ油)からなっている外用薬でこれも幅広く用いられています。

